

平成 30 年度霞ヶ浦学講座 第 12 講 実施報告

実施日時：平成 31 年 2 月 17 日（日）13:30-15:30

場所：霞ヶ浦環境科学センター多目的ホール

講師：沼澤 篤（霞ヶ浦環境科学センター嘱託） 受講者数：55 名

テーマ：「霞ヶ浦の歴史 1—古代～近世（常世国—豊かでダイナミックな内海世界）」

要旨：「霞ヶ浦の歴史」について、県史や市町村史編纂事業では出土品、古文書、漁撈具、民具等の史料に基づいた実証的研究成果が蓄積されていますが、文化史、民俗学的アプローチをふくめ、環境史的視点を持った「霞ヶ浦通史」の体系的な構築は今後の課題です。

古代（縄文、弥生、古墳）の霞ヶ浦周辺における自然や社会の状況は、貝塚や古墳の調査によって詳細に研究されています。飛鳥から奈良時代頃の霞ヶ浦の状況は常陸国風土記によって具体的に知ることができます。風土記には「魚の種類が多すぎて書ききれない」とあります。古代常陸国は大和王権の影響を受けつつ、水陸のサチに恵まれた「常世国」でした。霞ヶ浦は香取海、行方流海、佐我流海、信太流海等と呼ばれていました。鹿島神宮は大和王権による東国開発の祭神として位置づけられ、常陸国は陸奥平定の重要な拠点でした。当時の東海道は霞ヶ浦周辺の陸路、水路を経て国府に達していました。

中世（平安、鎌倉、南北朝、室町、戦国）の霞ヶ浦沿岸の人々は各地の津に拠り、漁撈、水運、湿田農業にいそしむ一方、中央と地方の権力（常陸平氏や地方豪族）、香取神宮、鹿島神宮による複雑な支配を受けながらも、課税根拠や移住の規制が弱かったことから、比較的豊かに暮らし、寺社に帰依し、自由磊落な気風を培っていたようです。当時は中央の統治権力が東国に及びにくい地政学的背景があるものの、承平・天慶の乱、保元・平治の乱の影響を受け、関東管領の上杉氏や北条氏の支配、小田氏や佐竹氏の台頭、南北朝期の争乱、室町、戦国期を経て、天下統一への過程に常陸国・霞ヶ浦周辺も巻き込まれました。一方、海夫（漁労や水運に携わった人々）が躍動し、湖賊が出没する霞ヶ浦は、人、物資、情報、文化が交錯するダイナミックな「常総の内海世界」とする位置づけが歴史家によってなされています。いわば霞ヶ浦は「ミニ地中海」でした。

幕藩体制が確立すると、江戸が政治経済の中心となり、霞ヶ浦沿岸は商圏に組み込まれ、高瀬船による水運が隆盛し、物資や人の移動によって江戸文化との交流が盛んに行われ、土浦、江戸崎、小川、高浜、牛堀、潮来、銚田などの主要な津は河岸として賑わいました。伊勢や近江商人が霞ヶ浦沿岸に大店を構え、常陸の物産（米、醤油、清酒、木材、薪炭等）を江戸に運び、帰船には呉服、雑貨、塩、糶などを積み、活発な商いを行っていました。その経済活動は明治期を経て今日まで続いています。江戸期後半、沿岸の津は次第に水戸藩や幕府の支配下に置かれ、海夫の子孫による自治は弱体化していきました。

一方、利根川東遷や浅間火山噴出物の影響で、沿岸地方は水害常襲地帯となり、土砂堆積による洲が出現し、汽水性が低下し、新田開発が促進されました。水害対策の普請（洲浚いや水行直し）に沿岸住民が半強制的に動員され、一部で反発を受けました。それらは今日の河川改修、築堤、干拓、水害対策、土地改良、霞ヶ浦開発へと繋がっていきます。